

京都橋大学
地域連携センター

つながる Vol.5

つながる

CONTENTS

巻頭言

京都橋大学のある場所—その歴史的景観—

細川 涼一 本学学長、地域連携推進機構長、文学部教授

Management & Design 04

地域連携の拠点をめざして

木下 達文 本学現代ビジネス学部教授、地域連携センター長

Interface 実践の知 第5回

琵琶の魅力を発信する四ノ宮

大田 雅之 本学地域連携センター リサーチ・アシスタント

京都モダニズム建築を訪ねて 第15回

石川ハウス

河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

Interview とともに 第5回

障がいのある人の社会復帰をサポートする、
あたらしい事業のカタチ

「一人で食べていける」&「仕事を楽しむ」をめざす
就労継続支援A型

山下 工人 株式会社クラウドナイン代表取締役



05

京都橘大学のある場所—その歴史的景観—

細川 涼一 Hosokawa, Ryoichi

本学学長、地域連携推進機構長、文学部教授

今日、大学の社会的使命として、大学の地域貢献が強く求められています。京都橘大学も、大学のある京都市山科区を活動の拠点として、さまざまな地域貢献の問題に取り組んでまいりました。

大学のある山科大宅の地は、歴史的景観にもめぐまれた場所です。私の専門は日本史ですので、大学のある場所の歴史的景観について、ここで少しお話をしたいと思います。というのも、私たち京都橘大学に勤める教職員や京都橘大学の学生が大学のある地域の歴史を知ること、この場所により親近感を抱き、そのことが地域連携に取り組む私たちの姿勢にも繋がってくると考えるからです。

大学のある山科大宅は、平安時代末期の1176年（仁安2）に造営されて以来、後白河院がたびたび訪れた後白河院の別荘、山科御所があった場所でもあります。大学の周辺には大宅沢や御所田という地名が残っていますが、これは山科御所の庭園や、御所に付属して米を供出する田圃があったことから残った地名です。大学から坂

を下って名神高速道路のトンネルをくぐった大宅沢には、大学が開学する少し以前まで大量の湧き水からなる大きな池があり、子供たちが泳ぐ場所となっていたとのこと。今は宅地造営で埋められてしまったこの池こそは、かつての後白河院の山科御所の名残であり、山科御所は水辺に建つ殿舎として、後白河院が寵愛する妻の建春門院滋子（平清盛の妻・時子の妹。高倉天皇の母）とともにたびたび清遊に訪れたのです。

また、大学を下がった所を通る奈良街道は、今日では車の交通量の多い殺風景な道になってしまいましたが、東海道から分かれ（山科の東海道と奈良街道の分岐点には追分という地名が残っています）、奈良に向かう街道として、古代以来、大津と南山城・奈良を結ぶ重要な幹線道路でした。1180年（治承4）5月、後白河院の皇子以仁王を奉じて平清盛の平氏政権打倒のため挙兵した源頼政（怪鳥の鶴退治で名高い武将です）は、大津の園城寺から奈良に向かう途中、宇治の戦いで敗死しますが、その途中に通ったのも大学の下を通るこの道でした。

Center for Regional Collaboration KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY

私は日本中世の寺社に関する文化史的研究が研究の中心で、その関係から、奈良西大寺の叡尊（1201-90）という僧侶が、鎌倉時代の1262年（弘長2）に、鎌倉幕府の北条時頼の招きで鎌倉に下向した際の記録『関東往還記』の注釈書を著したこともあります（細川涼一訳注『関東往還記』平凡社東洋文庫、2011年）。そこで、次に『関東往還記』から、叡尊が京都橘大学のある醍醐・山科地域を通過した際のことを記しましょう。

1262年の2月4日に奈良の西大寺を出発した叡尊とその弟子約10名は、奈良街道を進んで、その日のうちに醍醐寺に到着しました。醍醐寺はかつて叡尊が僧侶として出家した寺です。6歳で母を失った叡尊は、醍醐寺門前の西の大道（現京都市伏見区醍醐西大路町）に住んで醍醐寺の鎮守社、清滝宮・長尾宮に仕えた、小坂の巫女と呼ばれた巫女の養子になりました。その縁で、17歳の時に醍醐西谷の円明房で出家をして真言密教僧になったのです。この思い出深い醍醐寺の宿坊に一泊した叡尊は、翌5日、昼食を醍醐寺で取ったあと（この当時

の僧侶の食事は正午の一食のみです）奈良街道を北上して、その日のうちに逢坂関を越え、近江国志賀浦四宮馬場（滋賀県大津市京町三丁目の四宮社＝現在の天孫神社）の持仏堂に宿泊したのです。翌6日朝は雨が降ったためぐずぐずしていましたが、昼食後に晴れたため、琵琶湖を船で山田津（現草津市北山田町・山田町）まで渡っています。京都橘大学の下を通る奈良街道は、逢坂山麓の追分（現山科区髭茶屋～大津市追分町）で東海道に出ますから、叡尊が1162年2月5日に、現在の京都橘大学附近を通ったことは確実です。

以上に述べたのは、大学のある地（したがって、山科区全体からすれば、ごくわずかな場所）についての12～13世紀の歴史の一斑にしか過ぎません。しかし、大学のある地の800年ばかりも昔についても、これだけのことを語るができるのです。拙い一文ですが、京都橘大学の教職員が私たちの勤務する場所の歴史的景観を知り、この地をより一層理解することに繋がりましたなら、これに過ぎる喜びはありません。

地域連携の拠点をめざして

Management

木下 達文 Kinoshita, Tatsufumi

本学現代ビジネス学部教授、地域連携センター長

早いもので、2001年の4月に京都橘女子大学に文化政策学部（現・現代ビジネス学部）が誕生し、初年度から地域連携をはじめからもう13年が経過しました。その間、大学は共学となり、学部も5学部となり学生数も約3倍になり、中規模総合大学へと変貌をしていきました。今でも覚えています。当時は地域連携といえるような活動はほとんどなく、全てが試行錯誤でありました。山科という土地も、京都の中では一番東端にあり、観光ガイドにもその情報が取り上げられることが希な、とても地味な存在であったように思います。

当大学における地域連携・地域研究事業も多様な形で進められてきました。文化政策学部が誕生した初年度から、地域連携に関心のある先生方が集まり、山科文化開発プロジェクトが立ち上げられ、地域の人々を交えながらの研究活動を通じて人的ネットワークの構築から始めていきました。その研究成果は、織田直文・木下達文編『文化開発の可能性—コラボレートする山科からの提案—』（京都橘女子大学文化政策ライブラリー02、晃洋書房、2004）としてまとめられています。その後、大学の地域連携教育が文部科学省の現代GPに採

択され、その成果が、織田直文編『平成16年度文部科学省採択 現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「臨地まちづくり」による地域活性化の取組 成果報告書』（京都橘大学、2006・2007・2008）にまとめられました。そして、2009年度からは、学内共同研究として、「山科盆地（山科・醍醐地域）における文化的景観の保存と活用に関する研究」という景観研究と、大学文化政策研究センター（地域連携センターの前身）における「産公民学際連携」による地域再生に関する研究を実施してきました。また、このプロジェクトとは別に2009年度から「山科盆地景観研究会」という活動も行いました。

一方、学外において筆者が担当してきました、「山科区役所・区民・京都橘大学による連携事業」についても着実に展開をしてきました。これまで年度ごとに以下の5つのプロジェクトを実施してきました。

- 2001年度：『京都市山科区ガイドマップ』の企画・編集・制作プロジェクト
- 2002～2003年度：『Let's Walk やましな ホップ・ステップ・マップ』の企画・調査・編集・制作プロ

& Design 04

プロジェクト（2カ年継続事業）

- 2004～2005年度：『写真集 モノクロームヤマシナ』の企画・調査・編集・制作プロジェクト（2カ年継続事業）
- 2008～2010年度：『山科魅力発見プロジェクト（2008年度）』
『山科の魅力冊子編集プロジェクト（2009年度）』
『山科魅力展開プロジェクト（2010年度）』
（3カ年継続事業であるが、年度毎に名称が変更された）
- 2011年度～現在：『山科魅力発見プラットフォーム事業』

その後、学部が増えて行くにしたがって、各学部学科での授業や研究だけでなく、地域貢献として、多くの先生方や学生達がまちで多様な活動を展開するようになってきました。また、昨年は山科区との地域連携協定を締結し、大学としても地域貢献を行っていくことを学則に明記するなど、大学全体で事業を進めていく体制が整ってきました。

そして、2014年4月には、学長がリーダーシップをとりながら学内全体の地域連携活動を統括する「地域

連携推進機構」を開設しました。また、当センターは、2014年4月より名称をわかりやすく「地域連携センター」とし（地域政策・社会連携推進センターを改組）、地域連携推進機構のもとで、本学が地域社会や地方自治体・企業・NPO法人等との連携した取り組みをより一層発展させるための活動を行っています。したがって、私の責務も大きくなったわけですが、無理なことをするのではなく、これまで通り大学が地域に果たせる役割を地道に続けていければと考えております。学内組織も大きくなりましたので、まずはそれぞれの学部・学科の情報共有が今後の大きな課題となります。また、地域課題というのは無数に存在するわけであり、全てに対応するわけにもいきませんので、各教員や学生の活動とのマッチングをセンターが行っていくことができればと思います。また、新規事業については、地域の方々が自立して動けるまでをお手伝いできるような形をとっていくのが望ましいと考えています。これからも、地域と大学がうまく輝けるような道筋を考え、行動していければと思いますので、引き続きよろしくご願ひ申し上げます。

琵琶の魅力を発信する四ノ宮

大田 雅之 Ota, Masayuki

本学地域連携センター リサーチ・アシスタント

本学がある山科には、四ノ宮という琵琶ゆかりの地がある。

平安時代、仁明天皇の第四皇子といわれる人康親王（さねやすしんのう）は、琵琶の名手であったが、目を悪くし28歳の時にこの四ノ宮に隠棲した。目の見えない同じ境遇の法師たちに琵琶を教え、生業の道を拓いたと伝えられている。このような話が残る四ノ宮では、現在どのようなまちづくり活動が行われているのだろうか。

琵琶の歴史を辿る

琵琶とは、主に楽琵琶、平家琵琶、盲僧琵琶、薩摩琵琶、筑前琵琶の5種類の楽器に大別される。起源は、ペルシャとされ、中央アジア、中国、朝鮮半島を経て奈良時代に日本に伝来されてきたという。日本に伝来する前の中国では「pinpan」と呼ばれ、弦を手前から外側へはじく音（ピン）と外側から手前にはじく音（パン）からピンパンと呼ばれていた。それから、ピンパン、ピパン、ピパとなり、奈良時代まではピパという名称であった。

かつて、琵琶の普及に大きく貢献したのは、琵琶法師たちである。彼らは、まちとまちを渡り歩き琵琶

を奏し芸を披露する、「まちかど芸能」という側面があった。現代よりも娯楽が少なかった時代にその芸は、現在の舞台芸術や映画、テレビ、ラジオに匹敵する娯楽であり、「語りもの芸能」である琵琶の音楽は、人々に「特別な時間」=非日常性=「ハレ」を与えていた。琵琶法師たちにとって、その町の「まちかど」が芸術場であり、民家の「軒先」が舞台になる時代があった。そこに琵琶の音楽を享受される側（観客）の存在があれば、どこでも琵琶の芸術場となりえた。



琵琶の説明コーナー（ミュージックサロン YOSHIKAWA）

琵琶を発信する、まちづくり

山科区・四ノ宮は、琵琶ゆかりの地域で、当道座という室町期にできた盲人の自治的互助組織の開祖とされるようになった人康親王や、平安時代の歌人・蟬丸ゆかりの史跡が現在も点在している。

山科を中心に活動している「弦楽ふるさとの会」では、琵琶を地域のソフトウェアとして捉え、文化資源を活かした取り組みとして、地域内外の人々に琵琶の文化を伝えている。また、四ノ宮地域の史跡を分かりやすく紹介する「弦楽マップ」を作成し、琵琶法師ゆかりの寺社をめぐってステッカーを集める「四ノ宮めぐり」の企画を通して、地域内外の方に四ノ宮を知ってもらう取組や、まちをつかった琵琶楽として伝統芸能の中でも希少な琵琶の文化性、琵琶の音を実際に聴いてもらう機会を増やしている。加えて、琵琶と四ノ宮を取り上げた紙芝居「四ノ宮物語—あまよのみこと—」を制作し、小学校や観光イベントなどで公演している。これは、人康親王を描いた紙芝居を、琵琶の音色を聞きながら学ぶことができるものであり、大きな反響を得ている。また、紙芝居の最後に琵琶を実際に触れる時間もあり、より琵琶に親しむ機会にもなっている。



質問に答える学生（ミュージックサロン YOSHIKAWA）

これらの活動は、歴史ある文化を後世に残すことと、文化に触れ共感する場を創出している。また、こういった交流から新たな活動が誕生する可能性も大きく望めることからまちづくり的にも大変有意義なことである。

四ノ宮六地藏演奏会

山科地藏・徳林庵では、毎年8月22日、23日の六地藏めぐりに合わせて、弦楽奉納演奏会が行われている。今年で7回目を迎え、琵琶に加え、ウクレレやチェロなど様々な音楽の演奏がされていて、だれでも鑑賞することができるイベントである。今年、「京都橘大学文化政策・現代ビジネス学会」と「弦楽ふるさとの会」が連携し、四ノ宮にある十禅寺と柳辻にあるミュージックサロン YOSHIKAWA において「琵琶の音鑑賞会」が企画され、〈まちをつかった琵琶楽〉として、伝統芸能

琵琶の魅力を発信する四ノ宮

の中でも希少な琵琶の文化性、琵琶の音を実際に聴いてもらう機会を増やしたいということで開催された。十禅寺では、平家琵琶と筑前琵琶が演奏された。平家琵琶は、平家物語の世界を語り継ぐ琵琶である。筑前琵琶は、近代になり芸能化した琵琶で、華やかな音色を基調とした琵琶である。鑑賞者は、両琵琶の音色の違いを聴き楽しんでた。

ミュージックサロン YOSHIKAWA では肥後座頭琵琶が演奏された。肥後座頭琵琶は、盲僧琵琶に属する琵琶であり、奏者の玉川教海氏は、肥後座頭琵琶



玉川教海氏（ミュージックサロン YOSHIKAWA にて）

の最後の琵琶法師といわれた山鹿良之氏の楽器を受け継ぎ、希少となった盲僧琵琶を今に伝える一人である。曲目は、「四季」、「葵上」、「道成寺」、「餅酒合戦」であった。その中でも「餅酒合戦」は、「くずれ」といわれる、娯楽的で余興として行われた盲僧の語り物芸能として希少な音楽であり、従来の宗教音楽を離れた音楽である。両箇所とも、定員を超える鑑賞者で溢れ、琵琶の音楽に聴き入っていた。演奏者の玉川教海氏も鑑賞者が温かく弾きやすかったと話していた。

演奏会に伴い、両演奏場所で鑑賞者に対して以下の3つのアンケート調査を実施した。内容としては、①今までに琵琶を聞いたことがある回数、②今回の演奏で琵琶にいただいたイメージ（雅さ、猛々しさ、おどろおどろしさ、その他）、③山科が琵琶ゆかりの地であることを知っていたかである。

①では、鑑賞者の約50%が琵琶の演奏をはじめて聴かれる方で、もっと身近に聴く機会があれば良いという意見があった。

②では、鑑賞者の約60%が（雅さ）を回答した。（雅さ）と答えたイメージには、正倉院の宝物である「螺鈿紫檀五弦琵琶」や源氏物語絵巻にみられる殿上人が琵琶を奏でる情景が反映されているのでは

ないか。(猛々しさ)と答えたイメージには、筑前琵琶の弾き語りや平家物語を題材にした曲目から受ける印象があるようだ。

③では、琵琶ゆかりの地域で琵琶の音色を聴くという連動性よりも琵琶の音を聴きたいという目的で演奏会を訪れた方の方が多いという結果に繋がった。

今年で7回目を迎える琵琶の演奏会が、回を重ねるたびに鑑賞者を増やし、琵琶に親しみやすいまちになりつつあるのではないだろうか。

地域と大学の連携について

今回のイベントは、様々な連携をとり各団体の持ち味を活かして行われた。「弦楽ふるさとの会」は、琵琶の専門的な琵琶プログラム構成や演奏家の依頼などを行いイベントのクオリティを上げる役割、「京都橋大学」は、学生が、チケット管理や記録撮影などのアーツマネジメントのノウハウを活かした運営の効率化を上げる役割を担った。イベントの広報も両者のネットワークで発信することで幅広い広報活動を展開し、定員を超える集客につながった。また、広報の広がりに伴い、様々な興味関心を持った人が



荒尾努氏 (十禅寺にて)

参加し、異業種交流も行われていた。

琵琶を鑑賞することにとどまらず、そこで交流が生まれることにより琵琶の理解が一層深まり、さらに地域資源の魅力に愛着がわくのではないかと考える。

今後の発展について

琵琶楽の音楽享受の機会利用を活かしつつ四ノ宮のまちづくりを行うには、アーツマネジメント(芸術文化と地域社会を結ぶ役割)が重要となる。すなわち、「芸術と社会をアレンジすること」を今回の演奏会を通して実践していた。琵琶の継承は、コンサートホールや劇場以外にも目を向け、仮設芸術場(カフェや寺社)などを通して琵琶の音楽享受の場に広がりをはかることが重要である。今後この音楽鑑賞会は、多種多様な団体と交流を深め多くの人に共感されるイベントとして続けていくことが望まれる。

琵琶の魅力を発信する四ノ宮

京都モダニズム建築を訪ねて 第15回*

*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

石川ハウス

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

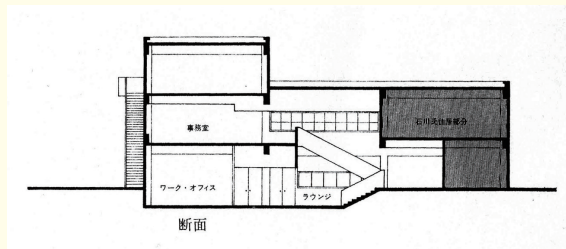


図1：断面図。中央部分を境に北側（左）がスキップフロアになっている。グレー部分は施主の住居。『新建築』1973.5

京都市営地下鉄・烏丸線の今出川駅を降りて、同志社大学の敷地の北端を東へ進むと相国寺の境内に入る。法堂を中心として左右対称に配置された木造の伝統的な建物と地面に敷き詰められた砂利と敷石、意外と背の高い優雅な樹形をした松などが醸し出す雰囲気はまさに伝統的な京都そのものである。烏丸通の喧噪が嘘のように静まり返ったその贅沢なアプローチを通り過ぎると、今回紹介する「石川ハウス」（1972）のコンクリート打放しの外壁が見えてくる。直方体を数個、ずらしながら積み重ねたような外観からは相国寺の境内のように静かで寡黙な印象を受ける。この建物に初めて訪れたのは今年の1月で、本学も参加している「駅ナカアート」の会議のために来たときであった。建物に入ると想像以上に広い吹抜けの空間が最初に出迎えてくれるのだが、ここはデザイン事務所であるGK京都のエントランスホールになっている（写真1）。GK京都はプロダクト、グラフィックや環境デザインを主な領域とする日本有数のデザイン事務所であるGKデザイングループのうちの一つで、お話を伺った相談役の吉田治英さんは「駅ナカアート」の仕掛人でもある。

建物の南側はお施主さんの住宅となっており、中央から北側の部分がオフィスである。先程のエントランスから吹抜けになっている部分が見えるのだが、そこが南側と北側を結ぶ中間地点となっている。そして、その吹抜

けが外観よりも大きく見えるのはこの建物がスキップフロアになっているためであった（図1）。エントランスから半階下がったところに打合せ用のラウンジがあり、半階上がったところに会議室が配されている。そのため、吹抜けは全部で2層半ほどの高さになっている。2階の東側に大きな開口が設けられているため、吹抜けは白く明るい気持ちのよい空間となっている。後述するが、この明るく大きな吹抜けには、以前ある仕掛けが施されていた。この吹抜けのあるエントランスから受付・事務を過ぎて奥に進むと、こちらにもまた半階下がったところに

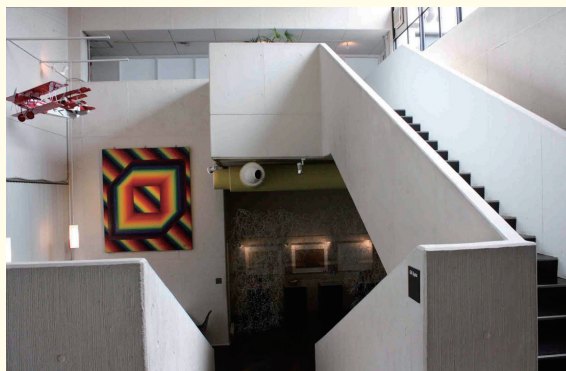


写真1：エントランスホール内観。明るく大きな吹抜けが特徴的。（写真：筆者撮影）

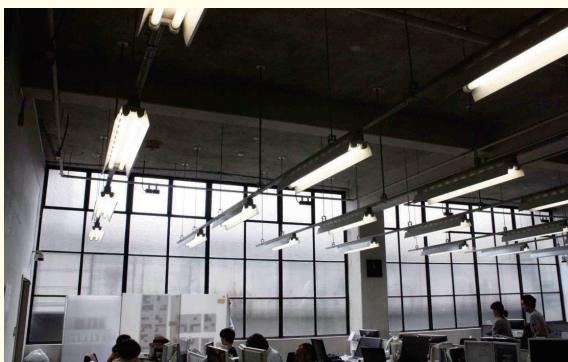


写真2：オフィス（アトリエ）内観。天井高が高く、北側のカーテンウォールから安定した光が得られる。（写真：筆者撮影）

広々としたオフィス空間が広がっている（写真2）。もともとこの建物は現在のお施主さんのご親族が民間人として国際親善に努められたことを契機に、自宅と合わせてアメリカン・センターとして建てられたものであった。アメリカン・センターは「広く日本の人びとにアメリカ文化を紹介する目的で、わが国では主要6カ所に設けられているものである。マイクロフィルム化された図書館とでもいうべき情報センター、集会、映写会、講演会など、種々な用途に利用される多目的室、管理関係室、およびこのセンターの館長の住宅によって成り立っ



写真3：写真1とほぼ同じ位置から見た竣工当時のエントランスホール。壁面や天井にスーパーグラフィックスが描かれている。『新建築』1973.5

ている」¹。アメリカン・センターであった頃には映画なども上映されたという多目的室が現在のオフィスであり、広々とした空間はデザイン事務所のアトリエにはまさにうってつけである。光量の安定した北側にはほっそりとしたスチールの枠に型板ガラスのはめ込まれた巨大なカーテンウォールが取付けられており、ハリウッド映画に出てきそうなアメリカらしい空間を演出している。また、竣工時には当時のアメリカ広報文化局のアートディレクターであったレイ・コマイ氏によるスーパーグラフィックスが吹抜けなどの壁面に描かれていた（写真3）。スーパーグラフィックスとは、単なる壁画ではなく、サインなどの機能を盛込んだカラフルでグラフィカルな表現のことである。これは1960年代後半に注目を集めたインテリアデザインの手法で、アメリカ人建築家チャールズ・ムーア（1925～1993）が代表作である「シーランチ」（1967）においてバーバラ・スタウファカー・ソロモンと共同で初めて試みたものであるとされる。他にレイ・コマイ氏は建築家・楳文彦設計の「加藤学園初等学校」（1972）のインテリアでも、同様のデザインを行っている。

コンクリート打放しの落ち着いた外観からは全く想像もできないこのような内部空間の大胆な仕掛けが、訪れた人を大いに驚かせていたであろうと想像する。壁面から壁面へ、そして壁面から天井へと空間を立体的かつ縦横無尽に駆け巡り、空間とともにグラフィカルなラインが連続していく様子は、現在見ても非常に新鮮かつ刺激的であり、次の「駅ナカアート」でも使えるようなアイデアである。スーパーグラフィックスは駅、オフィスや学校など、無機的になりがちな公共空間を、明るく機能的で元気の出る空間に変貌させるために有効な手段であり、既存の空間の特徴を把握し新しいアイデアを加えていけば現代的でわくわくするような空間を産み出す可能性を秘めているように思える。

参考図書：日本インテリアデザイン史 2013

¹ 植田寿章「石川ハウス」『新建築』1973年5月号、p.228

障がいのある人の社会復帰をサポートする、 あたらしい事業のカタチ

「一人で食べていける」&「仕事を楽しむ」をめざす就労継続支援A型

ゲスト

山下 工人 Yamashita, Norihito

株式会社クラウドナイン代表取締役

聞き手

松本 賢哉 Matsumoto, Kenya

本学看護学部准教授



山下氏



松本准教授

障がいのある人と雇用契約を結ぶ 就労継続支援A型

松本 まず初歩的な質問ですが、就労継続支援A型とB型の違いを教えてください。

山下 どちらも障害者総合支援法に基づく施設で、A型は利用者と雇用契約を結び、基本的に最低賃金を払います。クラウドナインも、京都府の最低賃金である時給773円を払っています。B型は、雇用契約を結ばず、利用者の出勤回数についてはゆるやかですが、賃金もA型と比べると低いところが多いです。

松本 山科区内では、A型事業所はあまり見かけないような気がします。

山下 私は今年の3月まで愛知県のA型事業所で働いていたのですが、愛知県と比較すると、山科区内の事業所数は、人口比率からみて10分の1程度しかありませんので確かに少ないですね。愛知県では、フランチャイズ形式でA型事業所を始めるところが多くて、ここ数年で一気に増えました。現在、全国でA型事業所が一番多いのが愛知県です。東京と大阪に比べても突出して多いので、県内に住む障がい者もA型に対する認知度がかかなり高くなりました。障がいをもっている方が取捨選択できるという意味では、事業所が増えたのは良いことですが、県内にA型はそれなりに増えたので、愛知県に近い地域で新たに開所できないだろうかを探していたところ、山科は人口の割に事業所数が少ないことを知り、今年4月から山科で事業所を立ち上げました。

ちなみに、社名のクラウドナインというのは、雲には9層があり、一番上の9層目が天国に近い最上位とされるところから、「幸せ」とか「意気揚々」という意味に転じたそうです。

Interview



山下 工人
愛知県安城市出身。中京法律専門学校卒業後に自動車部品の金型製造工場で働く。その後、司法書士事務所に勤務。平成23年2月に株式会社サンワーク（就労継続支援A型事業所）に入社（総務、兼、生活支援員として働く）。平成25年10月、株式会社クラウドナイン設立。平成26年4月、就労継続支援A型事業所として開所する。

障がいに合わせて工夫で、チャレンジを促す

松本 山科のクラウドナインは、どんな事業をしているのですか。

山下 主に工業用ミシンを使った縫製で、これは愛知県で始めたものです。4年前に愛知県でA型を立ち上げたときは自動車の部品製造の仕事を受けていたのですが、東日本大震災で工場の操業がストップして、仕事が回ってなくなりました。それで、内職業者さんから簡単な内職の仕事を回してもらったのですが、簡単な作業では職能が身につかないので、一般企業に就職できる可能性がとても低いのです。それでは事業所の目的に合致しないので他の仕事を探していたら、縫製の仕事は多いということを知り、さっそく始めることにしました。

松本 就労継続支援事業所の目的は、一般企業への就職がなかなか難しい障がい者に働く機会を提供するとともに、そこでの生産活動を通じて、働くために必要な知識や能力を向上させる訓練などの福祉サービスを提供することですから、次のステップに行けるかどうか重要な点ですね。

山下 その点、ミシンなら、技術も身につくし、自宅にミシンを置けば、会社に行くのがつらい人でも出勤せずに働くことができるかもしれないと考えたわけです。

松本 いま手がけている主な製品は何ですか？

山下 きんちゃく袋、コースター、がん患者さん用のニット帽、空手衣のネーム刺繍などですが、ミシンを使わない作業もあって、スポンジの型抜きといった簡単な仕事をミシンメーカーさんからいただいています。利用者さんのなかにはミシンができない方もおられるので、本当にありがたいですね。

ただ、ミシンは難しそうという方でも、工夫を重ねることによって、チャレンジしてもらおうとは思っています。

松本 チャレンジを促すための工夫とは、たとえばどのようなことですか？

山下 直線を縫う場合、手に障がいがあると震えて、ミシン目が歪んだりするので、あてをつくって、まっすぐ縫えるようにします。足がうまく使えなくてペダルが上手に踏めない方の場合、うまく踏めるようにジグ（治具）を作ることも必要です。とくに身体障がい者の方については、どんな障がいであれ、その方に合わせるような工夫がたくさん要すると思います。

スタッフにとって利用者は、「障がい者」ではなく、ひとりの「人」

松本 利用者さんの障がいの種類について教えてください。

山下 精神障がい、身体障がい、知的障がいの方がほぼ同じ比率で来ておられます。定員は20名で、現在19名の方が利用されていますが、施設外就労（出向のようなかたちで一般企業で働く、いわゆる適応訓練）ができるようになれば、あと14名ほど利用していただくことができます。

利用者さんは、山科在住の方が多くて、約半数は自転車、バイク、徒歩で来られます。それ以外の方は、電車で山科駅まで来てもらい、スタッフが駅から送迎します。

松本 職員体制はどのようになっていますか？

山下 役員が2名、スタッフが3名で、来月からスタッフが1名増える予定です。

松本 スタッフには資格が必要ですか。

山下 福祉サービスを提供する施設で、就労支援をする事業所については、サービス提供のプロセス全体を管理するサービス管理責任者を、最低1名は配置する必要がありますので、クラウドナインでも1名配置しています。サービス管理責任者になるには、福祉、医療、教育のうち、いずれかの分野での一定の実務経験と研修受講が必要です。

松本 精神障がいの方が利用されているというお話でしたが、スタッフに精神保健福祉士の方はいますか。

山下 1名いますが、資格取得者であるかどうかはさほど重視していません。もちろん、福祉の視点をちゃんと持っていることは大切ですが、対象が障がい者であっても、健常者と接するときと同様に、コミュニケーション能力が大事です。資格を持っているがゆえに福祉の視点

からのみ相手を見てしまいがちなところもあるので、むしろ作業そのものに詳しい人や売上を向上させる力を持っている人を優先して採用したいですね。福祉に関わる知識や見識は、社内外の研修で学んでもらうこともできますから。

株式会社の特徴を生かした支援の仕方 —仕事の動機づけで、自信とプライドを育てる

松本 クラウドナインは、社会福祉法人ではなく株式会社です。このように福祉や医療の分野に株式会社が入参するケースが増えていますが、株式会社のほうが利点があるのですか。

山下 NPO 法人や社会福祉法人は、認可を得るのに少し時間がかかりますので、よりスピーディーに立ち上げられる株式会社の方が私たちには都合が良かったというのが1つと、もう1つは、株式会社の方が、運営に使う資金について、自由度が高いので、後々、色々な事業展開がしやすいだろうというのもありました。

それと、そもそも障がい福祉サービスの目的というのは、「障がい者の社会的自立」なのですが、私たちが考える就労継続支援での「自立」とは、「自活すること」「一人で食べていける」なんですね。つまり経済的に自立してもらう。そのためには会社としても、できるだけ高い賃金を利用者に支払ってあげたい。なら、まずは会社が利益をたくさん上げていくことが必要だなと。そう考えると営利法人が一番相応しいのではと思いました。

松本 経済的に自立可能な賃金を払うために、利用者に対しての厳しさを求めることもありますか。

山下 少なくとも出勤率はシビアに見ますね。「きょうは調子が悪いので休みたい」というようなことが頻繁にあると困るので、「週5日、1日4時間なのだから、本気で働く気があるなら、頑張って出勤しなさい」という

話をします。利用者さんを雇用するかどうかを決めるときも、能力の高低よりも、やる気があるかどうかを重視します。

あと、当然ですが、製品の質にも厳しく対応しています。私たちは、ものづくりをする生産体として不良を出すというのは致命的なことです。不良品が多い時は、私も厳しいことを言ったりします（笑）。なので、不良対策のミーティングはかなり頻繁にしますね。その時に重要なのは、まずはスタッフを入れず、利用者さんだけでミーティングして案を出させる。そうすると責任感が出てきて、「この仕事は自分がつくりあげたのだ」というプライドが育ち、仕事の効率もすごく上がります。

継続して働いてもらうためにも、厳しいだけではだめで、どこかにその反作用（楽しい瞬間）がある職場でなければ、人は育たないです。そのためにも仕事への動機づけが大切ですし、それを一緒に探していくことが運営の仕事だろうと感じています。

仕事を楽しむことが、自信につながる

松本 障がいのある人を受け入れる側である一般企業に対して、伝えたいことはありますか。

山下 まだまだ障がい者に対する偏見も強い社会ですから、障がい者雇用というと、リスクばかり心配されがちだと思いますが、日常的に障がい者の方と接している立場から言わせていただければ、「能力の高い人がけっこういるのに、もったいないな」というのが実感なんですね。たとえば「昔はコンピューターのプログラマーをしていた」とか「もともと教師だった」という人も少なくないし、体力的にも十分な方が多い。そういった一人ひとりの特性や弱点に配慮しさえすれば、一般企業でも絶対に役に立てる部署があるはずなので、ぜひ、それを知っていただきたいと思います。

松本 実際に施設外就労をしている人はいますか。

山下 クラウドナインでは、まだいません。ただ、施設外就労を始めるにしても、縫製業界に限定しないようにと思っています。私の以前の職場（愛知県のA型事業所）でも施設外就労の受け入れ先には、農作業やウレタン加工業などがあります。というのは、縫製業界に限定してしまうと、利用者さんの選択肢が狭くなるんですね。できるだけたくさんの可能性を担保できるように、いろ





就労の様子

いろな方々とつながりをつくって、信頼できる受け入れ先を探そうと思っています。

松本 クラウドナインが大切にしていること、モットーは何ですか？

山下 仕事を楽しもう、仕事に夢中になれる自分をめざそう、ということですね。仕事に夢中になれば楽しいし、楽しければ継続できるし、継続すれば力になるし、力は自信になって、さらに仕事が好きになる…というふうに、よい方向にどんどん循環していきます。逆に、つまらない、興味をもてないことをしていても力は身につかない。だから、私たちとしては、ご本人の意欲や希望も踏まえつつ、仕事に夢中になれたり、仕事が楽しくできるような目標を設定してあげないといけないと思っています。

ただ、長期的な目標だけでは、なかなか力が出ないというか、働いているその瞬間が楽しい仕事でなければ、「なりたい自分」をめざすという目標までたどり着けないと思うんですね。

松本 その瞬間が楽しくなるような仕事とは、どんなイメージですか？

山下 たとえばオリジナルブランドのコンセプトや製品デザインを利用者さんに考えてもらうんです。私自身、コンピューターグラフィックスに興味があって、あれこれと妄想するのが好きなのですが(笑)、人間というのは考えたり妄想しているときがいちばん楽しかったりしますよね。そういう楽しい時間を作業に組み込んでいく。そうすれば、いまやっている仕事楽しくなって、いま、この瞬間を楽しむことができ、やがて「なりたい自分」

という自己実現の目標にたどり着くことができる。そんなイメージかなと思います。

ただ、そういう次元をめざすには、利用者さんのミシン技術をもっとレベルアップしなければなりません。今年4月から始めて、ある程度踏めるようになるには2年ほどかかるので、これからミシンの製造メーカーで研修を受けてもらったり、取引先に教えていただいたりしつつ、クラウドナイン独自の育成カリキュラムをつくらうと思っています。愛知県でやっているときは、できることを少しずつやっていくうちに自然と力がついてきたという感じでしたが、これからはそういうわけにはいかないと思うので。

オリジナルブランドで質の高いモノづくりを —コラボレーションの可能性

松本 オリジナル製品については、「障がい者が一所懸命につくった作品だから、買ってあげよう」というレベルではだめだという指摘を、よく耳にします。

山下 そのレベルでは、趣味の領域だと思うんです。質の高いブランド力のある製品を量産できて初めて仕事になる。なかなか難しいことですが、それができれば利用者さんのプライドになると思います。そこまでの道筋を作ってあげることが、私たち運営が絶対にやらなきゃいけないことだと思っています。そのために、販路の開拓も含めて、いろいろな分野の方々のお力を借りしたいですね。

松本 本学は、山科の商店街や伝統産業の活性化、まちづくりの取り組みに参加していて、近年では、特産の山科ぶどうを使ったタルトを、学生と地元のケーキ屋さんで共同開発しました。

山下 そういったコラボレーションはおもしろいですね。異分野の人と話すすと、まったく違う視点に気づいて、私たちの発想や視野も広がり、とても勉強になります。まだスタートしたばかりなので、できていないことはたくさんありますが、これまでの経験から、まじめに仕事をしていれば、自然とつながっていくだろうという感触も持っているので、今後は、他の分野の方々のお力を借りながら、私たち自身が切磋琢磨をして、利用者さんに「一人で食べていける」という自信と、夢中になれる楽しさを味わってもらえたらと思っています。(了)

社会で生きるということ

今回インタビューさせていただいた、株式会社クラウドナインのことを知ったのは、山科こころの健康を考える会の平成26年度総会の時に、山科区に新規参入していただいた事業所としての紹介であった。本学のある山科区は精神疾患を受け入れてくれる事業所がとても少なく、働ける場や日中の居場所が少ないのが現状である。

総理府障害者対策推進本部（現：内閣府障がい者制度改革推進本部）の「障害者プラン」では、その骨格として、リハビリテーションとノーマライゼーションの理念を踏まえて、以下の7つの視点から施策の重点的な推進をされてきた（下表参照）。表の②にあげられているプランでは、障害の特性に応じたきめ細かい教育体制の確保および障害者とその適性と能力に応じて可能な限り雇用の場に就き、職業を通じて社会参加できるような施策の展開がうたわれ、「各段階の適切な教育の充実」「法定雇用率達成のための各種雇用対策の推進」「第3セクター・重度障害者雇用企業等の設置促進」が目標とされていた。

表：障害者プランの骨子

①	地域で共に生活するために
②	社会的自立を促進するために
③	バリアフリー化を促進するために
④	生活の質（QOL）の向上を目指して
⑤	安心な暮らしを確保するために
⑥	心のバリアを取り除くために
⑦	我が国にふさわしい国際協力・国際交流を

これらのプランが進まないと、精神に障害をかかえた人々が、病院から地域へ生活の場が移行しても、居場所を失ってしまうので、非常に重要な課題である。そのためにはまず、近所に障害を抱えた人を雇用する企業があることが重要であり、今回、株式会社クラウドナインが山科にできたことは非常にうれしいことである。しかしそれだけでは不十分で、インタビューの中で山下様も述べていたように、障害を抱えた人自身の準備も必要である。その準備とは、精神科リハビリテーションと言われるもので、精神に障害を抱えた人が自分で選択した地域で自分の目的を達成することへの援助である。たとえば、単身生活したり就職したりする際、『自己についての理解：作業能力・集中力・調子が悪くなりやすい状況はどんな時か、など』と『それはどんな環境かということについての理解：一人で暮らすのはどのような事をするのか・仕事はどのような内容か、など』が非常に大切になってくる。さらに併せて、自分がめざそうとする目標（一人暮らしをしてどうしたいのか・働いて何をしたいのか、など）を達成するために“必要な”スキル（調子を崩しそうな時にはどのような手当をするか・今いる所を居心地良くするために、など）を身につけることを援助することである。その相互の理解とそこを目指し続けるための技術が大切になってくるので、その準備を整える援助（精神科リハビリテーション）が入院中から必要となることを改めて感じたインタビューだった。

（松本 賢哉）

つながる Vol. 5（2014年10月15日）

発行：京都橘大学 地域連携センター

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

Telephone: 075-574-4186 Facsimile: 075-574-4149

http://www.tachibana-u.ac.jp E-mail: icps@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学
地域連携センター
Center for Regional Collaboration
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY